

アメリカの人種と貧困

～『ルーツ』から考える～

木下 武徳
立教大学

ご存知の方も多いと思いますが、アフリカから黒人奴隷として連れてこられたクンタ・キンテとその血筋の小説家であるアレックス・ヘイリーにつながる子孫がどのように生きてきたかを示した『ルーツ』という小説・ドラマがあります。コロナ禍の直前でしたが、アメリカの黒人に対する警察の不当な差別や殺害が問題になり、Black Lives Matterのデモが日本でも大きく報道されました。黒人奴隷は終わったのかもしれませんが、黒人への差別の問題は終わっていないようです。私の黒人である友人はアメリカでは毎日何か対応を間違えると逮捕されたり、撃たれたりするかもしれないと不安に思いながら暮らしているけど、日本に来るとそういう心配がないから日本に住みたいと言っていたことを覚えています。日本でも差別はあるとは思いましたが、たしかに撃たれる心配はかなり減るとは思いました。

アメリカのロサンゼルスに2000年に初めて行ったときの印象では、マネージャー層には白人、バスの運転手や郵便局、その他接客業は黒人、ハウスキーパーや庭の剪定、露天商はヒスパニックの人が多く、人種によって階層化されているのだなと思いました。『Poverty in the United States, 2022』(U.S. Census Bureau, 2023)によれば、貧困層に占める人種ごとの割合は、白人44.0%、ヒスパニック28.4%、黒人20.1%でした。ただ、人口に比してヒスパニックや黒人の貧困の割合は10ポイントほど高くなっていましたので、人種というものがやはり貧困に影響していそうです。

ただ、2010年にアメリカに滞在する機会を得てロサンゼルスにいたとき、5月18日の『ロサンゼルス・タイムズ』(以下LAT)に大変面白い記事が出ていました。「In search of the meaning of 'Mozingo」(「モジング」の意味を求めて)です。LATの白人の記者だったJoe Mozingo氏が、自分の名字が珍しいので調べてみたという記事です。Mozingoはイタリアっぽいからイタリアの先祖かとも思いながら調べてみたら、なんと財産目録で黒人奴隷だったことがわかったという話でした。他の黒人奴隷は名字も英語風に変えられたのですが、アフリカの貴族だったのでそのまま名字を使うことを許してもらえたということでした。元々は黒人でしたが、途中で白人との子どもができ、徐々に白人の血筋になったということでした。別の血筋のアメリカの南部に住む遠い白人の遠い親戚が白人至上主義団体KKKを支持していたので、あなたの祖先は黒人ですよと教えたらとても怒られたという話も紹介されていました。また、別の血筋で1960年ごろに生まれたMozingo兄弟は「Mixed」の親から生まれ、兄は白人のように見え、弟は黒人に見えました。弟は黒人差別を受けながら生きてきたけれども黒人コミュニティに入りアイデンティティが保たれ、兄は黒人からは白人だ、白人からは黒人だと言われ、どこにも所属できず孤立していることが紹介されていました。

2022年にアメリカに行ったときに、たまたまホテルで見たテレビで、日本のNHKの『ファミリーヒストリー』のような番組で、一般の人の申し込みでルーツを探り、教えてくれるという番組がありました。依頼人は白人のように見える人でしたが、その人の祖先も黒人奴隷に行き着いたということでした。結構びっくりするようなことだと思うのですが、本人があまり驚いていないことが印象的でした。LATの報道もあたりだったので、もうあまり驚かれるようなことではなくなっているのかもしれませんが。

この番組をアメリカの友人に話をしたら、日本人の血筋のある友人を知っているが、その人はおじいさんがイタリア人と結婚し、その娘である母はフランス人の父と結婚し、その友人はまた他の国から来た人と結婚するので、いまは国別のルーツを強調して日系だとかイタリア系だとかいうのは意味がなく、「アメリカ人」というのが一番だと言っていました。さすが移民の国、アメリカだと思いました。

実は日本も長い視点で見れば同じだったのかもしれないと、昨年末に放送されたNHKの『日本人とは何者なのか?』を見て思いました。それによれば、東京に住む日本人の縄文DNAの割合は1割でしかなく、その後多くの渡来人=移民が来てそちらの影響の方が断然に大きいということでした。アイヌの人は縄文DNAが7割あるそうで、DNAとしていえば、アイヌの方が本来の日本人なのかもしれません。長い歴史を見れば、日本も移民の国なのではないかと思いました。

2023年2月に立教大学でニューヨーク市立大学のジェームズ・マンディバーク先生にアメリカの貧困に関する講義をしていただきました。そのなかでアメリカのロサンゼルスにあるマンハッタンビーチの一部は1912年に黒人から市が強制的に摂取したのですが、2022年にその子孫に返還し、子孫はそのビーチを市に売却したそうです。結果として、金銭的な補償をしたということです。2019年に連邦最高裁判所はオクラホマの土地の半分はネイティブ・アメリカンの土地だと判決をだしたそうです。そして、貧困のような構造的な問題は構造的に解決すべきであるとマンディバーク先生は主張されていました。2023年7月にオランダ国王が奴隷制について謝罪をしたというニュースがありました。子どもの貧困の連鎖が日本でも問題になっていますが、こうした連鎖と続く貧困の問題を考えると、重要な視点を得られたと思いました。

アメリカ、日本でも人種的に不利にある人や外国人への支援のあり方については、こうして長い歴史でルーツを見てみると、人を差別する理不尽さとその回復がいかに重要なのかを痛感させられます。



メリーランド州アナポリスのアレックス・ヘイリーの像（筆者撮影）